

説明的文章(1)

◆指導ページ P.2～7◆

【指導のポイント】

指示語と接続語は説明文の内容理解において大切な手掛かりとなる。指示語の指す内容に着目することで、既知の事柄から筆者の主張への流れを読み取る。接続語の種類、それぞれの接続語の意味と用法に注意し、文章中での役割を読み取る。接続語をもとにして文中の前後の意味のつながりや隣り合う段落の関連を読み取る。文章例をもとに具体的に学習する。

確認問題の板書例

■展開

〈料理の初心者とプロの違い〉

初心者 ↓ 考えているレパートリーから、食材を集める
プロ ↓ 材料を決めてからレパートリーを選ぶ

つまり

初心者 ↓ 技術から発送
プロ ↓ 資源から発想

(レパートリーの広さとその応用力)

〈近代産業技術〉

設計図(技術)が先にあり、必要な資源を世界から集める

技術に要さない資源は一切省みられない

偏在資源の過度な依存

各国がしのぎを削り、国際情勢の変化

一国の経済基盤が揺らぐ

*日本はそのような産業技術優等生

■主張

資源問題乗り越え、新しい文明への道を拓くには、もとの資源から生産する発想に切りかえることが必要である。

重要語句

○枯渇⇨物が尽きてなくなること。

演習問題Aの板書例

■展開

〈技術開発の歴史〉

技術の進歩

← 周りの環境の制約を取り払う

← 人間の能力を代行する機械を生み出す

(歩く↓自動車、皿を洗う↓食洗機、掃除↓掃除ロボット)

← 人間の定義を変える(肉体的制約からの解放)

〈身体で定義されない人間〉

人間のアイデンティティの所在

← 脳の指令を、遠隔操作により機械の体に伝える

(⇨人間)

↓ その機械はあたかも自律して見える

(反論)人間の脳でつくられた指令⇨人間であり、機械

← はそれに従うだけ

← 徐々にその指令の自動化

← 人間と機械の定義が曖昧

■まとめ

技術の進歩で機械で置き換えられた人間の肉体的機能は、人間を定義する上で必要のないものとされてきた。技術の進化は人間の存在価値、生きることの真の意味を私たちに投げかけてくる。

演習問題Bの板書例

■展開

〈ほんとうの自分〉

「ほんとうの自分」

↓ 「作り話」

← まったく知らない人間に向かって、データラメな「自分の過去」を物語らないと見つけれられない

← 「自分の過去」を語るにより、都合の良い自己像を聞き手に植え付ける

← どういう人間だと「聞き手に思っしてほしいか」によって「ほんとうの自分」は決まる

← 過去を知らない人間は、「作り話」を信じるしかないため

← 「私の作り話」を信じさせるのは必要なこと

← 時々過去をリセットしないとやっていけないから

(例 高校デビュー)

← そのときどきで適当にキャラを変えるほうがよい

■まとめ

「ほんとうの自分」というものは、過去の回想が意図的に選択された一種の「作り話」であるが、時々「作り話」をして過去をリセットしないと、人間、やっていけないものなので、そのときどきで適当にキャラを変えるべきである。

説明的文章(2)

◆指導ページ P.8～13◆

【指導のポイント】

段落相互の関係を捉えるには、各段落の内容を読み取る必要がある。疑問の形から問題提起を、段落中で繰り返し用いられる中心的語句から段落の中心部分を見つける。段落間で、関連しあう語句や新出する中心語句をおさえ、段落の初めの語句に着目する。初めの語句がないときは適切な接続語を補い、隣り合う段落とのつながりを読み取る。要点をまとめるには、まとめのたらしきを持つ語に注意し、付加部分を省き、中心語句をもとに文意が通るようにまとめる。

確認問題の板書例

■展開

〈環境保全をし、人類が幸福を享受して生き延びるには？〉

物質的豊かさ ↓ 精神的豊かさ

×大量生産・大量消費の文明

二酸化炭素の問題・地球の浄化

森の復活(植林や除・間伐)

森の文化の復元

〈縄文の森の文化〉

三内丸山や鳥浜貝塚が有名

森の文化の満喫

縄文人は精神的にも物質的にも豊かな生活

衣

材料：繊維質の草や樹皮(毛皮もあったかもしれない)

製品：網・バスケット・ポシエット

↓オシャレ感覚？

*シナの木の子葉 ↓ 縄

食

旬のもの

・クリ、クルミ、トチ、ドングリ、ヒシ(↓貯蔵)

クリの植林の確実視

・春 ↓ 山菜、秋 ↓ キノコ

・ヤマブドウ(↓酒)

住

木と森の文化レベルの高さ

・漆器、木製品、建造物

・木工の発達の可能性の示唆

演習問題Aの板書例

■テーマ

道具に宿る創造的な感性

■展開

〈日本人と写真〉

・外国の街で眼鏡をかけてカメラを持っていたら日本人
・俳句に似ている(断片を瞬間の姿でとらえる)

(矢立てを腰に行脚する素人宗匠)

・写真に写った自然を見るために旅行するのだと嘲笑される

現実にある枠の中に切り取ってそこに単純化された現実を見て安心する

(現実についての自分の感動)

(角度・距離・陰影により単純化)

西洋人(リアリズム絵画)

ある感情の姿勢を均質に保ち続けることが目的

〈現代アートにみる写真の今後〉

絵画や彫刻、観念のおもちゃが入り乱れる

一方写真の本質である三次元を二次元に移し取りたい欲望は永遠

日本の感覚が写真の未来を切り拓くかも？

■まとめ

人間が写真の自然にばかり興味を示すことは、逆説的だがそれにより自然と人間をつなぎとめている。

重要語句

○逆説Ⅱ 一見、真理にそむいているようにみえて、実は一面の真理を言い表している表現。

演習問題Bの板書例

■展開

〈しつけの在り方〉

① 親がモデル

② 一貫性(×気まぐれ、×両親の意見の不一致)

根本 ↓ 自分を親に近づけた

×権威主義・形式主義

社会の慣習や徳目自体の維持

〈しつけは人間的なもの〉

幼児期のはじめ ↓ 形式的には上から下へのしつけ

幼児期後半 ↓ ならび合って努力する(戦友)

自律を促す

重要語句

○失墜Ⅱ 名誉・権威などを失うこと

3

説明的文章(3)

◆指導ページ P.14～19◆

【指導のポイント】

要旨をとらえる流れとしては、段落毎の中心部分(要点)と段落相互の関係より、筆者の意見が強調されている段落を見つける。文章構成については、多くの場合、結論は初めか終わりにある。問題提起の部分と結論部分から要旨という流れを押さえるよう注意する。要旨は、段落毎の中心語句をつなぎ合わせてまとめる。様々なタイプの文章例を用いて実践的に要旨をまとめる訓練を重ねることが大切である。

確認問題の板書例

重要語句

○起因⇨物事の起こる原因となること。

■展開

〈ギリシヤ〉

- ・世界は神々によって創られた完全なもの
- ・できる限り完全な形で次の世代に引き渡す

⇨

〈物理学の熱力学第二法則〉

- ・エントロピー増大の法則
- ・物質とエネルギーは秩序⇨無秩序
- ・地球上はトータルとして無秩序の方向に向かう

⇨

〈近代西欧文明〉

- ・人間の手を加えない自然は無価値
- ・技術の進歩は人間を幸せに導く

⇨

個人主義(自分の利益の追求)

⇨

環境問題、人口問題、食料問題、その他技術革新の導く危機

⇨

不安感

⇨

現代人の生き方

⇨

自然からますます遊離した生き方

⇨

■主張

〈ギリシヤ時代の世界観をかみしめよ〉

- ・人も生命に違いない
- ① 子孫をつくり、種としての生命を維持
- ② 進化の法則

⇨

有限性を乗り越える

⇨

生命の歴史は何十億年という長さ

⇨

自身の寿命の中だけで物事を考えず、次の世代に今ある自然を残すことを視野に入れる必要がある。

演習問題Aの板書例

重要語句

○魔が差す⇨悪魔が心に入りこんだように、一瞬判断や行動を誤る。

■問題提起

〈ヒトはなぜヒトを殺してはいけないのか?〉

討論番組で話題になり世を騒がせた

⇨

■解答および考察

〈ある看護婦の話〉

患者さんの昔の話を聞き、ひとりの人としてみる

(顔が見えるようになった)

⇨

看護に対しての自覚がわく

⇨

〈解答〉

この世にヒトという抽象的なものは存在しない

(顔のある人を殺すのは心の痛みが伴う)

⇨

〈考察〉

子供は大人を写す鏡(フランスの社会学者)

⇨

大人の映し、つまり社会の映し?

演習問題Bの板書例

重要語句

○魔が差す⇨悪魔が心に入りこんだように、一瞬判断や行動を誤る。

■展開

〈守・破・離〉の教え

「守」(決まった作法や型を守る段階)

- ・面倒でもおもしろくない
- ・素直に手本を真似るのが効率的

⇨

(↓気づけば率先して手本を守る)

⇨

「破」(決まった作法や型を守る段階)

- ・創意工夫をしながらいろんなことが試せる
- (手本の作法や型を手に入れ、そこから出ようと意識することが必要)

⇨

効率的で合理的な方法の創出

⇨

(作法に背くのは悪いことのようにも思える)

⇨

時代の変化に合わせて、周囲の条件も必ず変化しているから、ためらう事はない

⇨

「離」(作法や型を離れて独自の世界を拓く段階)

- ・理解と経験に基づいて、新しい別のものを生み出す
- ・従来の技術やシステムを常に効率化
- ・制約条件や外部からの新たな条件にあわせて全体をつくり変えられる
- ・異変を一目で見抜く眼力(↑経験・知識+先人の理解)

⇨

(設計者の例)

文学的文章(1)——小説①

◆指導ページ P.20～25◆

【指導のポイント】

小説の場面と展開については、作品の背景(時代・地域・社会状況)をふまえ、個々の場面で、構成要素-時・所・人物-の移り変わりを追い、できごと・事件の内容を読み取り、あらすじをつかむ。場面展開の主な型である、発端→展開→山場→結末をおさえ、山場に注目して読む。場面を想像するには、場面の雰囲気、場の様子、周りの風景などにも注意する。語り・描写の視点にも注目し、だれの視点なのかを判断する。

確認問題の板書例

■出来事

ぼく(優太)が町のトライアスロンレースのリレー部門に美里中の代表として仲間の二人と出場した。そこで中学生チャンピオンの加倉井と争うことになった。

■情景

ぼくが町境にたどり着く(折り返し地点)

(残りのレースは加倉井との意地の張り合い。コーチの鶴じいのおかげ)

ぼくがぐんと足を前に踏み出した

(同じタイミングで加倉井もスピードを上げる)

(肺がひゅうひゅう鳴る。血がごうごうと流れる。筋肉がみしみし音を立てる)

二人は一緒にさらにスピードを上げる

(二人ともつらそうにしている)

フィニッシュゲートに近づく

(桜色の旗がたくさん揺れる。友人や先生の顔。声援)

ぼくが白いゴールテープを切る

(ひとりの女の子の「優太」の声に後押しされた)

重要語句

○音をあげる⇨苦しさに耐えられず声を立てる。

演習問題Aの板書例

■出来事

〈夕暮れ時の小さな児童公園〉
小学生くらいの少年が一心にブランコを漕いでいる。

■情景

残照を含んだ空は甘い薄紫色

少しだけ色づいた公孫樹の葉が散っている

↓ブランコから降りた少年が、一瞬強い視線を私に向けた

↓少年が泣いているのに気づく

・私の回想

その少年と同じくらいときに拾った子犬の引き取り手探しをした。結局、交番で力を借りてその後五日で引き取り手が決まってしまった。そのとき、どこかそれをこぼんでいた私は悲しくなり、近くの公園で泣きながらブランコを漕いだ

しばらくして、またその少年のいた公園を通りかかる

↓友人とバドミントンをしている

↓自分なりに処理しようだ

少年の打つ白い羽が、薄い夕闇のなかで綺麗な弧を描いた

↓きれいにおさまり少し大人に成長した

演習問題Bの板書例

■出来事

汽車が隧道にさしかかる最中、例の小娘がしきりに窓の戸を下ろそう(開けよう)としている。(隧道の中で窓が開いていると車内に煤煙が入り込んで汚れてしまう。)

■情景

例の小娘が窓を開ける

(感極まった少女↓同情を引くが、行為には嫌悪)

↓隧道に入り、開いた窓から煙が入る

↓隧道を抜け、貧しい町はずれの踏み切りに通りかかる

↓三人の男の子が一生懸命に娘に何かを伝えている

(小娘の奉公の見送り)

娘が懐の蜜柑を投げた

(三人の子供たちの労に報いた)

↓私は感動を覚える

↓取り直して娘は席に戻る

↓娘の凛とした強い意志

重要語句

○労に報いる⇨行いに対し報酬を与えること。

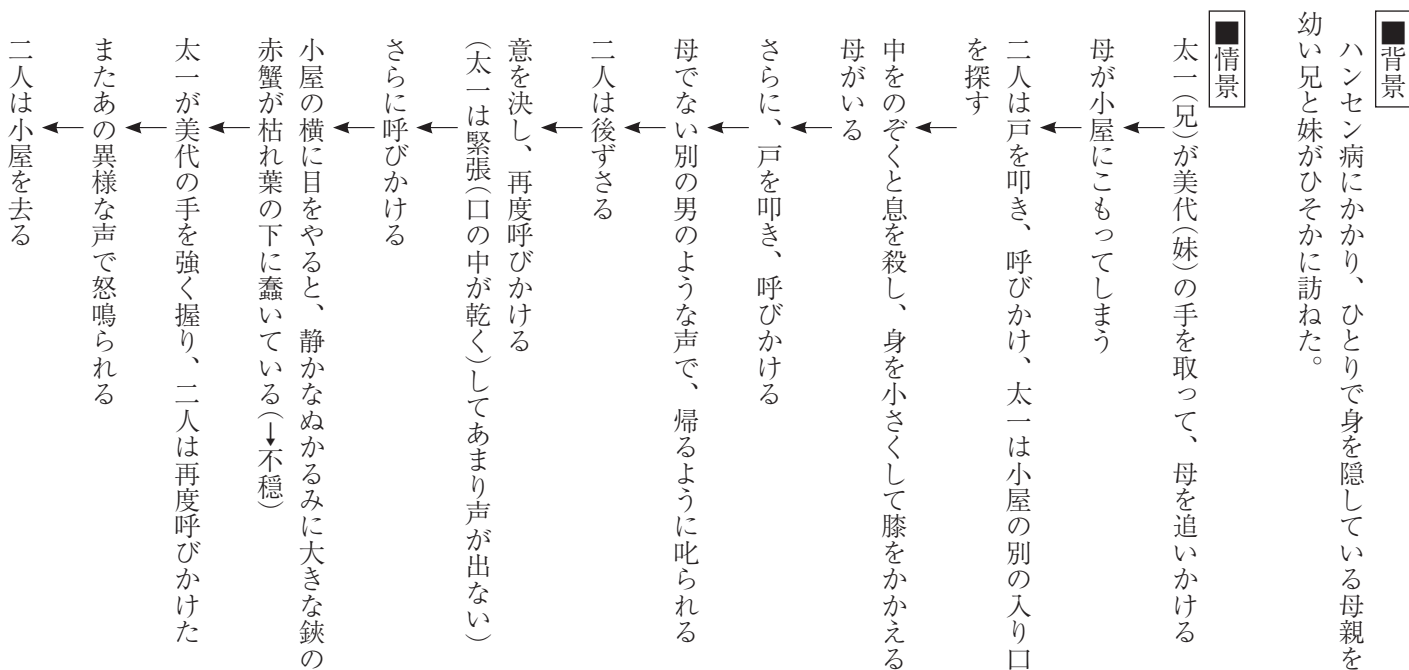
文学的文章(2)——小説②

◆指導ページ P.26～31◆

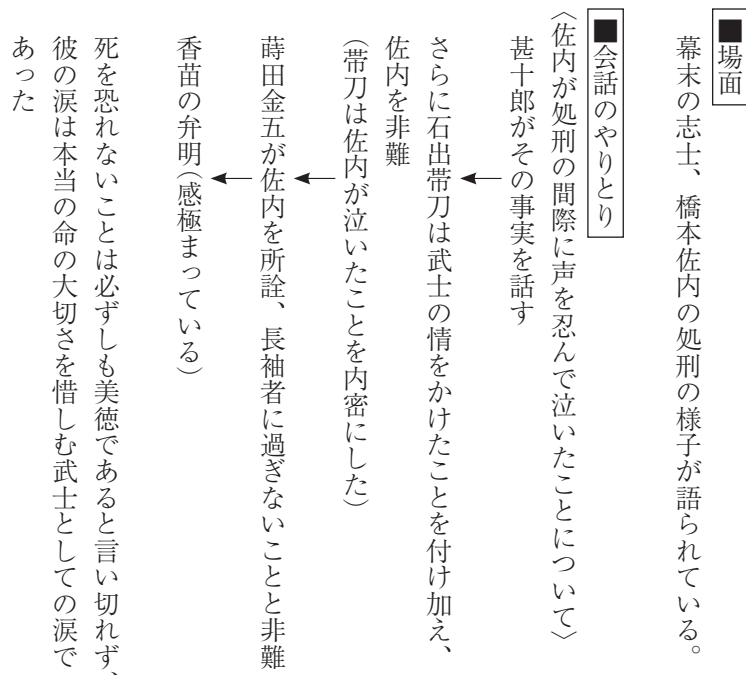
【指導のポイント】

心情を捉えるには、直接的な描写だけでなく、人物の言動や様子など様々な角度から読み取る必要がある。風景や事物にも心情が込められている場合もあるので、間接的、象徴的表現にも注意し、できごとや情景の変化に伴い心情が変化していく様子を読み取る。主題を捉えるには、作品の筋の展開や組み立て、山場の部分に注目し、主人公に焦点を当ててその言動から心情、性格をつかむ。主人公の行動や生き方を通して、作者の執筆意図や作者が訴えたい内容を読み取る。

確認問題の板書例

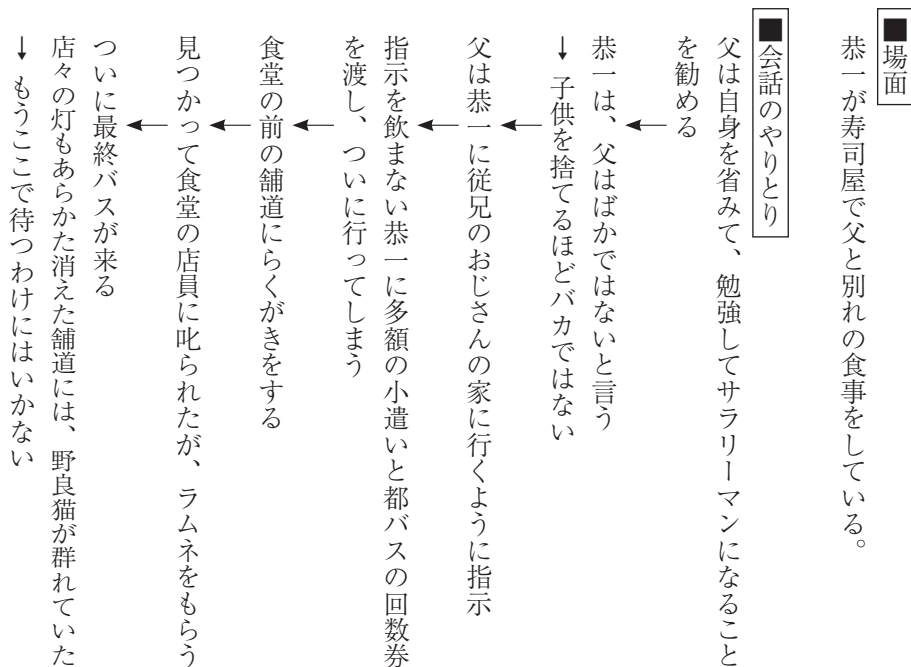


演習問題Aの板書例



重要語句
○未練⇨執心が残って思い切れないこと。あきらめきれないこと。

演習問題Bの板書例



重要語句
○法外⇨普通に考えられる程度をはるかに越えていること。

文学的文章(3)——随筆

◆指導ページ P.32～37◆

【指導のポイント】

随筆は、文学的、論説的など様々な随筆に分類できる。随筆の内容に応じて、説明文・小説の読み取り方をそれぞれ復習する。問題提起の部分や多用する語句から話題をとらえ、筆者は批判的か肯定的かを判別する。文末表現や引用例から事実と意見を区別し、筆者が強調する内容とその理由を読み取ると、主題をつかむヒントになる。筆者の独特な工夫・表現、筆者が用いる表現技法にも注意し、総合的に考えることで、筆者が最も言いたいこと(主題)をとらえて行く。

確認問題の板書例

■テーマ
古新聞の畳み方

■展開

〈古新聞〉

ふつうに折り畳んでも端が不揃いになる

↓ 読み棄てた新聞はざっと畳んで捨てていた

正確に折り畳んだ古新聞の山

↓ 衝撃的なもので強いショックを受ける

無意識の常識が覆される

(読み棄てた新聞紙はキッチンと折り畳むことはできない)

↓ 無知によるおこないだったと気づく

読み終えた新聞紙をキッチンと畳むようになる

↓ 古新聞はキッチンと畳める可能性を秘めているため

家族には強要できない

↓ 古新聞をキッチンと畳むことの必要性を説明できない

自分だけのおこないとして、誰もいないときに畳み直す

重要語句

○埋没⇒うずもれて見えなくなる

○強要⇒無理強いをすること

演習問題Aの板書例

■出来事

私は娘の帰りを待っている。遅くなることを知っていて、送ってもらおう手筈だが、もう一―一時になろうとしている。

■展開

女親の細い神経が張りはじめ

間違った電話がかかる (老妻を案ずる老人からの電話)

心配するのを察して、すぐに帰るだろうと言って安心させる

・私だけでなく大切な人の帰りを待つ者はい

↓ 心の余裕

・その言葉を自身にもかける感覚

秋めいた感情

静かな長い夜を楽しむ心の余裕

重要語句

○迂闊⇒うっかりしていて心の行き届かないこと

演習問題Bの板書例

■テーマ

「こんにちはと言うだけの関係」の「善」

■展開

〈「こんにちは」の習慣〉

・地元の公立学校に通う(↓ 母親同士の距離が互い近い)

・実家の手伝いで近所によく出かける

・母親が小学校のPTA会長

母に紹介されては、多数の親たちに「こんにちは」をする (それが誰の親かは知らないことが多い)

近所の道行く人に「こんにちは」することが習慣化

(「知らんぷり」が面倒。しかし、片っ端から挨拶して相手がいまいち誰だかわからない)

〈考察〉

顔見知りの人は「こんにちは」する関係をつくる

(もう知りあいであって、それ以上は知る必要もないという暗黙の関係)

未知の人がいなくなり、住環境は穏やかになる

古典(1)

◆指導ページ P.38～41◆

【指導のポイント】

古文の主な特色を学ぶ。歴史的仮名づかいのきまりや仮名表現に慣れる。現代語にない語い、特に、現代語と同じ形で意味が異なる語に注意する。省略された主語は文脈を考えて判断し、省略された助詞は補いながら意味を読み取る。係り結びは、文末の結びとそれぞれに係ることばを理解する。和歌については、三大和歌集それぞれの和歌の作風の特徴をつかみ、和歌の技法「枕詞」「掛詞」「句切れ」を学ぶ。漢文については、レ点と一、二点の読む順序、漢詩の種類を行数と一行の字数から分類することを理解する。

確認問題の板書例

<p>1</p> <p>■文法事項 〈現代仮名遣い〉</p> <p>まどひて↓まどいて やうやう↓ようよう</p> <p>〈現代語訳〉</p> <p>さることにあらず そういうことではない (↓来客に鳥たちを振る舞うことではない) さること そういうこと あらず ではない</p>	<p>2</p> <p>■文法事項 〈枕詞〉</p> <p>玉葛(絶ゆる時なく)を導く)</p> <p>■内容</p> <p>どこまでも這っていくつる草の永続感を自身の恋心に重ねている。</p>	<p>3</p> <p>■文法事項 〈形式〉</p> <p>五言絶句</p> <p>書き下し文</p> <p>二行目(レ点) ↓楼に登れば万里春なり 四行目(一・二点) ↓是れ故郷の人ならず(不↓ず)</p> <p>■内容</p> <p>都から離れたこの地の高楼に立つと、春景色が眺められる。しかし、ここを歩きかう者は皆、見知らぬ異郷の者ばかりで悲しい。</p>
--	---	--

演習問題の板書例

<p>1</p> <p>■本文 〈現代語訳〉</p> <p>など馬よりおりざるぞ どうして馬からおりないのか など なぜ ざるぞ しないのか</p> <p>一人当千：一人で千人の敵を相手にすること。</p> <p>——線④の「候ふ」 ございます ↓「ある」の丁寧語</p>	<p>2</p> <p>■知識</p> <p>万葉集 ↓奈良時代 古今和歌集 ↓平安時代 新古今和歌集 ↓鎌倉時代</p> <p>A</p> <p>・枕詞：ひさかたの(「雨」)を導く)</p> <p>・二区切れ</p> <p>C</p> <p>・さやかに はつきりと</p>	<p>3</p> <p>・返り点</p> <p>2 不覚ニ到ル君ガ家ニ 1 5 3 4 覚エズ君ガ家ニ到ル 気がつけばあなたの家に着いている。</p>
---	---	--

古典(2)

◆指導ページ P.42～45◆

【指導のポイント】

古文の読み取りの際、登場人物が別の言い方で示されていることがあるので注意する。敬語表現や文脈をもとに、動作主や人物関係をつかむ。また、中心人物(随筆では筆者)の言動や意見からその考え方や生き方をつかみ、導入部と結論部、中心人物の言動から総合的に主題をとらえる。古典の俳句は松尾芭蕉を中心に学び、「季語」から季節をつかみ、情景を想像する。漢文訓読の基本は、「返り点」をもとに読む順序を理解し、助詞や活用語尾にあたる「送り仮名」を読みをもとに書き下し文にすることを学ぶ。

確認問題の板書例

<p>1</p> <p>■本文</p> <p>〈現代仮名遣い〉</p> <p>人のなりたるなり〓人がなったのだ</p> <p>何として〓どのようにして</p> <p>空よりや降りけん〓天から降ったのだろうか</p>	<p>2</p> <p>■内容</p> <p>物心ついた愛しの我が子の問いかけに窮しているが、その考えの深さを自慢したい親心がある。</p> <p>季語から季節を読み取る</p> <p>A: 初しぐれ(雪) ↓ 雪</p> <p>B: 行く春 ↓ 春</p> <p>C: 秋の風 ↓ 秋(日差し)の照る中に秋の風を感じている</p> <p>D: 菜の花 ↓ 春</p> <p>E: 冬こだち ↓ 冬</p>	<p>3</p> <p>・漢文―返り点・送りかな↓書き下し文</p> <p>・子〓孔子</p> <p>■内容</p> <p>孔子は次のように言った。「三人連れだつて行けば、その中に必ず自分の師がいる。その中の良い人からはその良いところを学び、その中の良くない人からは良くない点を改めるようにするのだ。」</p>
--	--	--

演習問題の板書例

<p>■文法</p> <p>〈現代語訳〉</p> <p>ここに宿し給ひてんや〓ここに泊まらせていただけませんか</p> <p>給ひてんや〓いただけませんか</p> <p>え出でおはせじ〓お出かけになるにはいけません</p> <p>え〓(じ)〓〓できない</p> <p>いつしか我が親のいひし月日の、とく来かし〓早く親の言った日が来てくれよ</p> <p>とく〓早く</p>	<p>■内容</p> <p>旅人が宿を求めているときに、大きい荒れ果てた家を見つける</p> <p>家のあるじの女に事情を話して、宿泊を許可される</p> <p>翌日、出発の際にその女に引き止められる</p> <p>旅人は女に借金をしていると女から告げられる</p> <p>真意を確かめるべく、旅人は易の占いを始める</p> <p>旅人は柱の中にあつた千金を女に教えた</p> <p>女の親は易の占いが上手かつたため、同じく易の占いに精通する旅人の宿泊を予知し、仕組んだ</p>	<p>易の占いは、正確無比である</p>
--	---	----------------------

詩歌(1)

◆指導ページ P.46～49◆

【指導のポイント】

詩歌の特色を学ぶ。詩は、用語と形式を組み合わせで分類する。詩歌の表現技法である比喩の直喩と隠喩、また擬人法は実例から学ぶ。その他の表現技法である「体言止め」や倒置・反復などの強調技法にも注目する。短歌では、意味の切れ目を示す「句切れ」や「枕詞」を学ぶ。俳句は、季節を示す「季語」や「切れ字」の用法を学ぶ。

確認問題の板書例

1

■表現

- ・現代の話し言葉、特定のリズムや形式はない ↓ 口語自由詩
- ・5行目「…な季節」名詞で終わっている ↓ 体言止め
- ・6行目～7行目「花も紅葉もぬぎすてた風景」 ↓ 擬人法

■内容

2行目～3行目

「日々のくらしを 土の中のくらしに 似せてはいけないうか」

日の短く寒い冬を、これから芽の出る期待宿る土の中に思つて気を紛らわせてもいいでしょうか

5行目

「形而上学的な季節」

考えてふけてしまふ冬の季節

11行目～15行目

「その上人間の…できるのです」

人間はこのようになつらく耐える冬にあつても、春が必ず来ることを知っているため、期待感を抱き待つことができる。

2

■表現

- ・およぐひと ↓ 反復法(くり返し出てくる)
- ・心臓はくらのげのようにすきとおる ↓ 直喩法(～のように)
- ・瞳はつりがねのひびきをきき ↓ 擬人法(「聞く」という動作)

3

A

見居りその揺るる枝を ↓ 倒置法

B

- ・枕詞：足乳根(母を導き出している)
- ・区切れなし

C

- ・四区切れ

D

雨を思へり―都の雨に ↓ 倒置法

演習問題の板書例

1

A

■表現

- ・口語自由詩
- ・1行目の「地平線」 || 鉄棒 (隠喩法)
- ・10行目「…な俯瞰」、11行目「…な雲」 ↓ 体言止め(名詞で終わっている)

■内容

鉄棒にぶら下がって一回転するときの様子

「僕」 ↓ 一人称

鉄棒を軸として、空が回る(地平線)

筋肉の動きを描き、運動の質感を出す

9行目～11行目 ↓ 一回転して頭が上になったときの安心感と安定感

B

■表現

- ・口語自由詩
- ・1行目の「雲たちの衣裳」 || プールに映る雲が水面に揺らいで映っている(これを花に例えている)
- ・4～5行目、10～12行目 ↓ 倒置法

■内容

- ・水に飛び込み泳ぐ様子
- ・「あなた」 ↓ 二人称
- ・あなた ↓ 蜂、水面 ↓ 花 に例えている

2

A

いつ春にならん ↓ いつ春になるのだろうか

B

なり ↓ 終止形(ここが区切れ)

3

■知識

〈季語と季節〉

大根の葉 ↓ 冬

〈正岡子規〉

俳句革新運動を行った

〈切れ字〉

や、かな、けり

詩歌(2)

◆指導ページ P.50～53◆

【指導のポイント】

詩の主題をつかむには、詩の雰囲気や情感をおさえ、情景と心情の両面から主題に迫る。情景・心情を繰り返し強調する部分や比喩・倒置・反復などの表現技法に注目し、題名や情調が最も高まった部分(感動の中心)から作者が最も伝えたいメッセージを読み取る。短歌は、句切れに注目して歌意を読み取る。情景と心情の内容から感動の中心をつかみ、作者の伝えたい思いや主題に迫る。俳句は、季語から季節を、句切れから作者が感動した対象を読み取り、詠み込まれている事柄から具体的な情景やイメージを思い浮かべる。

確認問題の板書例

<p>1</p> <p>■表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3行目「泣きぬれた母雲の顔」 ・6行目「抱き寄った四つの雲よ」 ・9行目「…雲の家族」 <p>↓擬人法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3行目「泣きぬれた母雲の顔」 <p>↓体言止め</p>	<p>2</p> <p>■知識</p> <p>切れ字…や、かな、けり</p> <p>↓区切れになる</p>	<p>3</p> <p>■内容</p> <p>AとBはともに孤独であることの寂しさを詠んでいる</p>	<p>■鑑賞文</p> <p>なまじ澄んだ音は浅い音に聞こえてしまう。それより、いくつかの音が混じり濁った音の方が、深みのある「いい音」と感じられる。言葉も同様で、「風鈴」は夏のものだが、重なるように「秋」があり、「秋の風鈴」となることで、秋になって忘れられていた風鈴が鳴ったという意味になる。</p>
--	--	--	---

演習問題の板書例

<p>1</p> <p>A</p> <p>■表現</p> <p>〈我が子が立てるようになる〉</p> <p>・影ができる</p> <p>↓ハイハイのときよりはつきりと大きな影</p> <p>←「影」(隠喩)</p> <p> 自意識(人には必要なものだが、人生を決める元凶)</p> <p>・「小さな疑いの石」(隠喩)</p> <p> 社会を渡り歩く知恵</p> <p>・「太陽の方角へ投げる」(隠喩)</p> <p> 明るい未来を信じ積極的に行動する</p> <p>・「石は三〇年…撃つだろう」(隠喩、擬人法)</p> <p> 将来、希望を実現できずに、挫折を味わうこともあるだろう</p> <p>・「もう一度…心の力で」(倒置法)</p> <p> 直面する困難に立ち向かう強い意志</p>	<p>■内容</p> <p>社会を渡って行くことは辛く厳しいが、逃げることもできず、立ち向かうしかない。将来、困難に直面しても強い意志を持ち乗り越えなさい。</p>	<p>D</p> <p>■表現</p> <p>万緑の中や 吾子の齒生え初むる</p>	<p>2</p> <p>■表現</p> <p>作者の行動を表現している</p> <p>↓BとD</p> <p>B 結句の倒置法から鏡に突然移った父親の顔を見て驚いている姉妹が想像できる</p> <p>↓ユーモア</p> <p>D 恋の喜びを歌ったもの</p> <p>↓ユーモアではない</p>
--	--	--	---

【指導のポイント】

主として助動詞や助詞から、そのまぎらわしい用例を比較して意味と用法を識別する。例えば、「れる・られる」では、受け身・自発・尊敬・可能と4つの意味があるので、文章のどこを読むことでどの意味かを判断できるか理解する必要がある。また、「ない」もまぎらわしい語の1つであり、助動詞と形容詞の識別などに留意する。

確認問題の板書例

<p>3</p> <p>動詞の活用の種類の見分け方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カ行変格活用：「来る」 ・サ行変格活用：「する」「～する」 ・「～ない」をつけて判断するもの <p>(イ段) 起きない ↓ 上一段活用</p> <p>(エ段) 出ない ↓ 下一段活用</p> <p>(ア段) 運ばない ↓ 五段活用</p>	<p>4</p> <p>「れる」、「られる」 ↓ 受け身・尊敬・自発・可能</p>	<p>5</p> <p>「ない」</p> <ul style="list-style-type: none"> — 単独で分節 ↓ 形容詞 — 単独で分節でない ↓ 打ち消しの助動詞 または 形容詞の一部 — 「ぬ」に置き換えて自然 ↓ 打ち消しの助動詞 — 「ぬ」に置き換えて不自然 ↓ 形容詞 または 形容詞の一部 <p>「だ」 ↓ 形容動詞の活用語尾、過去の助動詞</p> <p>「らしい」 ↓ 形容詞の一部(彼らしい)、推定の意味を表す助動詞</p> <p>「な」 ↓ 断定の助動詞の連用形、形容動詞の連用形</p> <p>* 「大変な～」をつけて自然 ↓ 形容動詞</p>	<p>6</p> <p>「が」 ↓ 接続助詞(逆説の「が」、主格を表わす格助詞)</p>
--	---	---	--

演習問題の板書例

<p>1</p> <p>(1) 「大きな」 ↓ 連体詞</p>	<p>2</p> <p>「○○っ」 ↓ 促音便</p> <p>「○○ん」 ↓ 撥音便</p>	<p>3</p> <p>ア・ウ・エは「ぬ」に置き換えられる ↓ 打ち消しの助動詞</p>	<p>4</p> <p>「思い出す」、「しのぶ」、「案じる」などのあとにつく「れる・られる」 ↓ 自発</p>	<p>5</p> <p>「彼女らしい」 ↓ 形容詞の一部</p> <p>それ以外は推定の意味を表す助動詞</p>	<p>6</p> <p>格助詞「の」</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 主語を示す(…「が」に置き換えられる) ② 連体修飾語を示す ③ 体言の代用(…「こと」、「もの」に置き換えられる) 	<p>7</p> <p>「う」、「よう」 ↓ 意志・推量・勧誘</p>	<p>8</p> <p>「で」</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 断定の助動詞「だ」の連用形 ② 接続助詞 ③ 形容動詞の活用語尾(連用形) ④ 原因・理由を示す格助詞
---------------------------------	--	--	---	--	---	-------------------------------------	--

表現

◆指導ページ P.58～61◆

【指導のポイント】

原稿用紙の使い方の基本を学ぶ。文章の書き方は、話題や主題を決め、書く題材や要点のメモ、下書きなどの準備、文章の構成、敬体と常体の混用を避け文体を統一する。また、主述、修飾・被修飾の対応に注意する他、書いた後の見直し、誤字、脱字、漢字や送り仮名のチェックが必要である。課題作文については、課題の意図や指定条件に注目する。例えば、意見文の二段落構成では、主な意見を述べる部分とその理由を自分の体験を交えて説明する部分に分けて記述する。

確認問題の板書例

<p>(2)</p> <p>・書き出し</p> <p>○ ○ ○ 「就きたい職業」 ○ ○ ○ ……</p> <p>○ 私は… になりたいと思う。 ○ ……</p> <p>… … …</p> <p>・一段落目はその職業について、二段落目はその理由</p> <p>* 原稿用紙の使い方に従い、用紙の八割～九割を使う</p>	<p>(1) 3</p> <p>原稿用紙の使い方</p> <p>① 題名…上から三、四字分下げて書く。</p> <p>② 段落…段落ごとに改行する。段落の初めは一字下げる。</p> <p>③ 会話文…改行し、「」でくくる。</p> <p>④ 句読点や符号…一マス使う。行末に来たら文字と同じマスに収める</p>	<p>(3)</p> <p>「学級委員の彼の友だちは、」</p> <p>↓ 「彼の友だちは学級委員で、」</p>	<p>(2)</p> <p>しての後に句点「。」を入れる</p>	<p>(1) 2</p> <p>「年老いた彼の猫」 ↓ 「彼の年老いた猫」</p>	<p>(2)</p> <p>わたしの夏休みの目標は、文法をしつかり復習する。</p> <p>↓ わたしの夏休みの目標 文法の復習</p>	<p>(1) 1</p> <p>「何は—何だ」</p> <p>(1) 彼の将来の夢は、大きなビルや橋を作る建築家になりたい。</p> <p>↓ 彼の将来の夢 建築家になること</p>
--	---	--	----------------------------------	---	---	--

演習問題の板書例

<p>(3)</p> <p>① 要旨を簡潔にまとめる</p> <p>(人間には「自然利用」と「自然保護」の両立が可能である。なぜなら人間は自然の一員だから。)</p> <p>② 筆者の考えに対する自分の立場を明確にする(理由も考える)</p> <p>(時事ニュース、見聞きしたこと、読んだ本などを思い返してみる)</p> <p>* 原稿用紙の使い方に従い、本文から書き出し、180字～200字でまとめる</p>	<p>(2)</p> <p>〔条件〕</p> <p>① 本文から書き始める</p> <p>② 理由もつける</p> <p>* 原稿用紙の正しい使い方に従い、用紙の八割～九割を使う</p> <p>②のヒント)</p> <p>・勇気がもたえる</p> <p>・語感が気に入っていて、明るい気持ちになる</p>	<p>■ メッセージ</p> <p>・ 良覚僧正を理解し、共感してあげる語り口がよい</p> <p>・ どろ沼にはまる彼を導く意見などがあるとよい</p>	<p>(1)</p> <p>■ 本文内容</p> <p>怒りつばい良覚僧正</p> <p>← 近くの榎の木にあやかって</p> <p>← 「榎木の僧正」(↑あだ名)</p> <p>← 僧正激怒</p> <p>← その木を切った</p> <p>← 残った根にあやかって</p> <p>← 「さりくいの僧正」(↑あだ名)</p> <p>← 僧正激怒</p> <p>← 切り株を掘り捨てた</p> <p>← そこにできた掘池にあやかって</p> <p>← 「掘池の僧正」(↑あだ名)</p>
---	--	---	--